effet pollen

「effet pollen」は、建築家、内装職人、研究者、カメラマン、デザイナー、家具職人、シェフ、音楽プロデューサー、
コーヒーマイスター、学生、ギャラリストなど、さまざまな分野に携わるスタッフがギャラリーに集い、
「アートとのより良い暮らし方」を模索するために生まれたプラットホームです。
ギャラリーという特殊な「場」で、さまざまな分野のクリエイターたちが活発なコラボレーションを展開しています。

心底惚れ込んだアート作品と暮らすための、それがもっと活きるような住空間はないだろうか。
「effet pollen space」は、作品と身近に生活するための場所を提案し、
生活を重ねることで、文化的な付加価値を空間に加える試みです。
物質的に充足した現代だからこそ、「豊かさ」についてもっとじっくり考えたい。
市場が定めた「高価な」ものを所有、消費することが必ずしも豊かさの尺度ではありません。
作品を中心とし、愛情を持って作り上げた空間は、時の経過とともに何ものにも代えがたい価値を育みます。
そんな、アートが本来持っている魅力や役割を、生活の場、あるいは日々の仕事の場で実現する。
今見過ごされているのかもしれない、本当の豊かさを見つめるための空間づくり。
私たち「effet pollen」がそのお手伝いをいたします。

effet pollen

「effet pollen」(花粉現象)―思考に命の種が宿っていれば、花粉のように飛び広がり、実を結ぶ―とは、世界で一番古いとされるインディペンデント・レーベル、“サラヴァ・レーベル”の主宰者であり、映像作家、詩人でもあるピエール・バルー氏の言葉です。
「effet pollen」は、本プロジェクトを推進するグループ名としてバルー氏からいただきました。この思想にあやかり、私たちの思いが芽吹いていくことを願っています。

気配

1989年師走、夜中の十二時も過ぎた時間だったろうか、ぼくはパリの中心街を歩いていた。フォーブルサントノーレ地区のとある映画館の前、冬の真夜中というのに長蛇の列ができていた。ふと道端にあった垂れ幕を見ると「Yasujiro Ozu」という文字が目に入る。当時、ぼくは映画監督小津安次郎のことについて、詳しい知識を持ち合わせていなかった。しかし、異国で周りを外国人に囲まれた中にいると、こうしたシーンに出くわすだけで、こころの中になんとも言えぬ熱いものがジーンと押し寄せてくる。誰でも自分たちが誇れたり、他の国を尊敬するのは経済の大小ではなく文化によることがきっと多いということだろう。

それから2年後、ぼくは福岡市中央区にある通称「けやき通り」にギャラリーをオープンし、それまでの人生とはまったく畑違いのアートに魅せられ、アートにより生み出される環境にも興味を抱き始めていた。アートがあることでどんなに人の人生が豊かになるのだろうか、そんなことを身を持って体験してきた。環境の中にもっと当たり前にアートが存在しても良いのではないか、そんなことも常々思っていた。そんなある日のことだ、小津安次郎監督作、映画「秋日和」のことを知る。

映画のワンシーンである。母親役の原節子の後ろには梅原龍三郎の薔薇の絵が掛けられ、艶やかな母親のイメージを表している。また、対面に座る娘役である司葉子の背景には山口蓬春の白い椿が映し出され、これから嫁いで行く娘の純朴なイメージを感じさせる。
監督小津は映画に使われる絵画や掛け軸など、すべて本物しか使わなかったという。「たとえば床の間の軸や置物が筋の通った品物といわゆる小道具のマガイ物を持ち出したのでは、私の気持ちが変わってくる。出演する俳優もそうだろう。

また、人間の眼はごまかせても、キャメラの眼はごまかせない。ホンモノはよく写るのである」と、生前の小津の言葉が残っている。本物とまがいものとでは映像から発する雰囲気がまったく違うということだ。多くの人にとって、たとえ気付かなくとも小津のような者の目はごまかせない。そして、そのこだわりや美意識は国や民族、もちろんを時空を超えて継がれていく。もし小津がそうしたことに無頓着であったのなら、あの時のパリでの行列はけっしてあり得なかっただろう。

ギャラリーを始めてつくづく思う。僕にとって素晴らしい作品とは、作品に何が描かれているかどうかということより、その作品に雰囲気が感じられるかどうか、その作品を覆う空間の品格を高めることができるかどうか、が重要である。そんな作品を人々に伝えていきたいと思う。そうした作品は周りの風景を一変させるばかりか、人の人生をも変えてしまうなにかがある。僕はギャラリーで起こるそんなドラマを22年間ずっと見続けている。

先日のこと、いつものようにギャラリーには作品を展示していたのだが、初めて訪れてくれた女子高校生が発したことばに、ギャラリーという役割の大切さをつくづく教えてもらった気がした。「わたしは親や先生、そして友達とコミュニケーションすることが上手ではないんです。でも今日、ここにいる作品たちと私の距離感がとっても心地良いんです。」人は自分のこころの奥にある、もしかしたら自分でさえ気付いていなかった、ほんとうに探しているものに出会えたとしたら、どれだけ勇気づけられるのだろうか。
ことばや文字は大げさにいうことも、偽ることも簡単だ。でも作品はけっして嘘をつかない。そんな作品を感じ、受け取る人が増えたら、どんなにか人の世はもっと豊かになるのだろうか。そんなことを願う毎日である。（敬称略）

森田 俊一郎

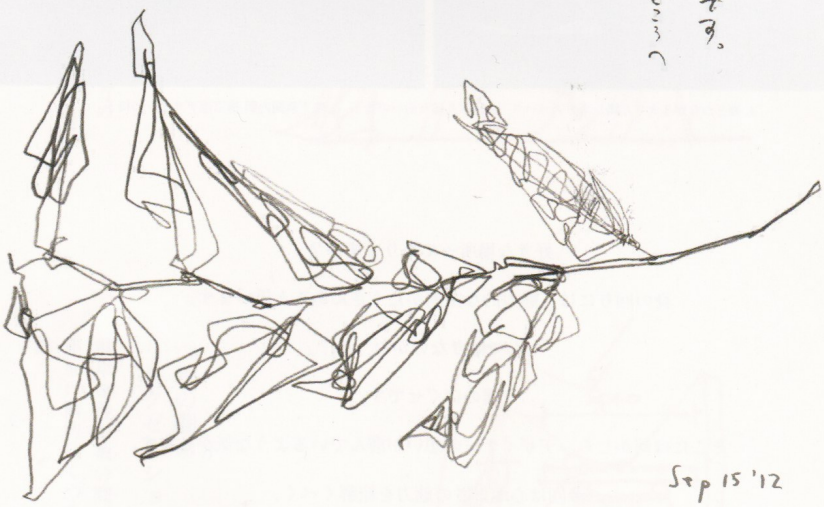
光の表情に触れるということ。

三津木　晶

effet pollen

-art-

作品の生きていくのは、もうすでに
作品ができた時点で決まっているようです。
私は彼らの足となり、作品の行くべきところへ
動くのです。そうして見の合う人と
巡り合うことができるしたら、
もっかり作品がその人のためになるよう
願うまでです。



Sep 15 '12